

常滑市民俗資料館

友の会だより

第14号



半田陸海軍大演習を見る群衆、フランス人ビゴー画
横浜開港資料館蔵（本文5頁ご参照）

平成5年9月発行(1993)

シルバーエネルギーを駆りたてる資料館^{トコロ}

盛田 宏 明



私が、館長着任を前にして、市教育委員会関係者のところへ、ご挨拶に伺った際に、皆さんが異口同音に言われる言葉の中に、「資料館友の会」についての助言がありました。

私が、どのような助言を受けたかと言いますと、「館長としての大きな役割の一つに友の会会員の方々と、常に友好を保ち、資料館の事業運営に協力を願うと共に、より強力な後ろ盾になっていただく事ですよ。」要約すればこのようなことでした。

6ヶ月が過ぎた今、「友の会」の皆さん方と接してみて、この言葉が如何に適切な助言であったかと言う事を、身をもって感じています。助言をしてくださった方々に深く感謝をする次第です。その理由は「友の会」の活力と行動力に起因しています。私から見れば、人生経験の豊かな大先輩が大勢みえる会員の方々が、平々凡々と余生を送るのではなく、積極的に「友の会」の活動に取り組んでみえることです。たとえば、会員の方々が当資料館で勉強してみえる「郷土史部会」、「古文書部会」、「やきもの部会」、どれ一つをとってみても大変奥の深い興味をそえられるものばかりです。浅学非才な私にとっては、このうえもない勉強の場を与えていただけ

る機会と喜んでおります。お許しがいただけるなら、私もぜひ一緒に勉強をさせていただきたいと思っております。

それからもう一つ、行動力の旺盛さにも驚かされております。「会報編集委員会」、「研修旅行企画委員会」等がそれです。「友の会だより」のすばらしさも、編集責任者の方の企画に対する緻密な計算と、豊富な経験、年令を感じさせない行動力、それに対する会員皆さんの積極的な協力があればこそです。研修旅行の為の企画にしても、沢山ある行先候補地の中から、会員に本当に喜んでいただける場所かどうか、自分で事前の調査をする、大変な事だと思います。本当に役員の方達のまとまりがよいですね。「友の会」の皆さん方が、会長さんのもと一生懸命郷土の貴重な文化遺産を守り、歴史、民俗に関する知識を深め、当民俗資料館の一助を担ってくださるこの事に関して、私達職員も「友の会」がより活動し易いように努力と協力を惜しまないようにしなければいけないと思っております。

私も、館長としてこの館に勤めさせていただける間は、先輩諸兄の知識をより多く学ばせていただき、より深みのある人間に成長したいものと思っております。その為にも微力ではありますが、自分の職責を果たす為に、精一杯頑張る努力をしなければと思う毎日です。

6ヶ月が過ぎた今、「友の会」の皆さん方と接してみて、この言葉が如何に適切な助言であったかと言う事を、身をもって感じています。助言をしてくださった方々に深く感謝をする次第です。その理由は「友の会」の活力と行動力に起因しています。私から見れば、人生経験の豊かな大先輩が大勢みえる会員の方々が、平々凡々と余生を送るのではなく、積極的に「友の会」の活動に取り組んでみえることです。たとえば、会員の方々が当資料館で勉強してみえる「郷土史部会」、「古文書部会」、「やきもの部会」、どれ一つをとってみても大変奥の深い興味をそられるものばかりです。浅学非才な私にとっては、このうえもない勉強の場を与えていただけ

る機会と喜んでおります。お許しがいただけるなら、私もぜひ一緒に勉強をさせていただきたいと思っております。

それからもう一つ、行動力の旺盛さにも驚かされております。「会報編集委員会」、「研修旅行企画委員会」等がそれです。「友の会だより」のすばらしさも、編集責任者の方の企画に対する緻密な計算と、豊富な経験、年令を感じさせない行動力、それに対する会員皆さんの積極的な協力があればこそです。研修旅行の為の企画にしても、沢山ある行先候補地の中から、会員に本当に喜んでいただける場所かどうか、自分で事前の調査をする、大変な事だと思います。本当に役員の方達のまとまりがよいですね。「友の会」の皆さん方が、会長さんのもと一生懸命郷土の貴重な文化遺産を守り、歴史、民俗に関する知識を深め、当民俗資料館の一助を担ってくださるこの事に関して、私達職員も「友の会」がより活動し易いように努力と協力を惜しまないようにしなければいけないと思っております。

私も、館長としてこの館に勤めさせていただける間は、先輩諸兄の知識をより多く学ばせていただき、より深みのある人間に成長したいものと思っております。その為にも微力ではありますが、自分の職責を果たす為に、精一杯頑張る努力をしなければと思う毎日です。

私も、館長としてこの館に勤めさせていただける間は、先輩諸兄の知識をより多く学ばせていただき、より深みのある人間に成長したいものと思っております。その為にも微力ではありますが、自分の職責を果たす為に、精一杯頑張る努力をしなければと思う毎日です。

陶製米搗臼

柿田 富造

精米用の米搗臼^{コメツキウス}は元来木材や石材でできていたが、明治15年に東京の秋葉作蔵は新しく真焼^{マヤク}

(よく焼き締めた)の陶製米搗臼を考案した。そして石井順治との共願で明治20年4月1日に

専売特許第325号「陶製米搗臼」(特許年限5年)を取得した。この特許の請求範囲は「堅硬ナル陶器ニテ作レル精米用ノ臼是ナリ」とあるように搗いても割れない臼でなければならなかった。

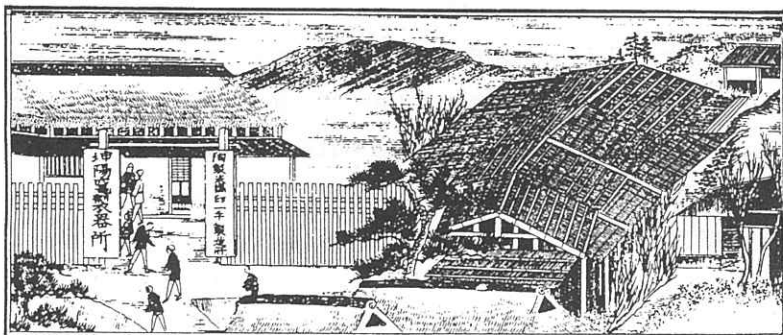


図1 衣川善右衛門の登窯〔尾陽商工便覧〕(明治21年)

最初常滑の衣川善右衛門はこの特許を譲り受けて、杵で搗く捉柄用臼(蜜柑堀)と底の深い足踏み式の器械用臼(卵堀)の2種類を製造した。そして販売にあたっては割れない減らない陶製臼であることを強調し、更に搗いた米は梅雨時でも湿気を含まない、飯粒に光沢が出るなどの利点があるとして「活眼ノ諸子御買求アラソコトヲ」と盛んに宣伝した。

ところが特許年限の5年はすぐ来てしまったので、秋葉・石井の両名は改めて特許を取り直し、25年4月8日に「陶磁製米搗臼」特許第1549号を今度は特許年限15年にして取得した。しかしその請求範囲は「石焼即チ磁製若クハ石土混合焼即チ陶磁製ノ搗臼是ナリ」とあるように、従前の「陶製」を単に「陶磁製」に変えた程度の改良であって、今から見るとこれ位の改良で、よくも特許が取れたものだと思える程である。ちなみに石井は、大正10年東京駅で暗殺された原敬首相の恩師に当たる有名人であったという。

「陶磁製」の品質を謳う以上、その製造は大変であった。臼が割れないようにその肉厚は横幅・底部共6cm前後という非常に

分厚い物となり、しかも紐つくりによる湿式成形法であったので、その乾燥は6ヶ月以上も日陰干しにする必要があったし、焼成も図1のような登窯(この窯を^{コンヨウ}坤陽窯と呼んだ)で7昼夜

程焼成しなければならぬ大変な労作であった。

販路は三重・愛知・岐阜・大阪の各府県で明治23年には年間200~300個位売れていたものが、26年頃になると大阪への市場が広がって、一躍1000個内外の販売量となった。

今のところ陶製臼1個に書かれた刻印銘は、次の4種類が見ついている。

(1)専売特許第325号

(2)25. 4. 15第1549号専売特許、

愛知県常滑町陶器臼製造所 衣川善右衛門

(3)25. 4. 15第1549号専売特許、

陶臼販売所 岡嶋善三郎

(4)尾張知多郡常滑町 堀本吉次郎

(1)製造者名はないが20~25年に衣川が製造した臼。(2)25年以降も衣川が引き続き製造した臼で最も事例の多いもの。(3)岡嶋がおそらく衣川よりも遅い時期に特許の譲渡を受けて造ったと



図2 信州妻籠宿の常滑焼陶製臼

思われる臼。(4)専売特許の刻印がない堀本の臼。その製造時期はよく分らないが、おそらく特許の切れた40年以降に堀本も製造し始めたものと思われる。ちなみに堀本は衣川と同じ常滑町丸山谷に工場を持つ隣同志であった。

また臼と高さ約20cmの台を一体成形にした台付臼もある。これには銘がないので造った年代はよく分らないが、大正四年の記念銘のある臼が1個だけ見ついている。それから臼ばかりでなく米を搗く杵にも陶器が使われていたこと

が最近分かってきた。

陶製臼は大正元年頃になって都会より摩擦式の米搗機械が普及し始めたので、その市場を奪われて10年頃には製造はほぼ中止され、その後は田舎向けにわずかに出荷される程度になった。

現在陶製臼は思わぬところに転用されている。例えば寺の用水甕、庭の造園用、植木鉢、手水鉢などがあげられるが、中でも愛知県美和町の蓮華寺では立派な線香立として活用されている。

知多郡代官所配下の私札について(二)

中野健三

私札が公然と各地方に姿を現したのは幕末文政(1819~)、天保(1830~)前後で、各地方で信用のある商人が発行した。

以下、弘化4、嘉永6、安政6、万延1、文久3、元治1、慶応3、明治と更に各地で増発されることになった。

知多郡代官所支配下発行のもの等

- 樽水村 明3 酒1合 銀1匁
- 古場村 酒3合 預銀3匁1匁
沢田儀左衛門
- 小鈴谷村 酒1合 預銀1匁、酒札3合
盛田久左衛門
- 坂井村 明2
酒3合 預銀3匁
陸井太右衛門
- 上野間村 酒3合 預
銀3匁、1匁
大崎次郎右衛門
- 上野間村会所
銀1匁、5分
- 常滑聯合札
米札1匁 預



- 北条・多屋・瀬木・榎戸・奥条地下等
- 常滑村庄屋 小形札 額面記載なし
- 常滑地下 当百換 銭札24文、16文 預
二枚折形札 銀7匁5分
銀3匁7分5厘
- 瀬木地下 賃銀7匁5分
- 北条地下 銀1匁
- 保示浦方 米代 1匁 預
- 西ノ口地下 銭札24文 12文
- 大野地下 銀3匁、1匁、5分
11月限 釣銭26文、16文、12文
- 大野組 農商切手 銭札3匁、1匁
銀札5匁、2匁、1匁 預
萩原宗平、平野助三郎、
杉山利兵衛、橋本弥七
- 紺屋弥兵衛 } 銀札5匁 預
- 菱屋三右衛門 } " 3匁 預
- * 紺屋與右衛門 } " 1匁 預
- * 西阿野のこうやさん
- 野間組 大崎治郎右衛門 銀札3匁 預
陸井太右衛門 銀札1匁 預
- 小野浦村 樋口九兵衛 銀札3匁

- 内海組 米代札 銀札3匁、1匁
 - 前野平五郎 } 白米札
 - 日比五郎左衛門 } 3匁、1匁
 - 磯部昇平 }
- 中須村
 - 大岩彦九郎 } 米札 1匁預
 - 天野吉左衛門 }
- △犬山領布土村
 - 羽山頼三郎 価銀3匁7分5厘
 - 稲生茂助 価銀3匁7分5厘
- 須佐村
 - 磯多屋治兵衛 白米代1匁預
- 篠島・日間賀島・佐久野島
 - 島仕送切手 村瀬喜助 銀札1匁
- 左海組 白米1斗、5升、1升
- 岡田組 萬物引換
 - 竹内源助 } 銀札1匁、5分
 - 新海三郎兵衛 }
 - 小嶋茂兵衛 }
- 半田村
 - 小栗富次郎、小泉三郎兵衛 } 銀札1匁、5分
 - 中埜又右衛門、中野半六 } 酒2合、1合
- 犬山藩支配所限通用
- △成岩村
 - 市野忠兵衛 } 錢札百文、48文
 - 沢田清兵衛 }
- △亀崎村
 - 間瀬半一郎 } 錢札百文、48文
 - 間瀬兵左衛門 }
- 生路村
 - 五右衛門、弥右衛門、徳右衛門 米代札銀1匁

- 村瀬彦助 小嶋源助 } 銀札
- 阪丈右衛門 日高理兵衛 } 1匁
- 野畑孫兵衛 竹内孫右衛門 } 5分

- 寺本四ヶ邑会所 米代銀1匁預
- 松原 銀1匁



この浮世絵の作者は歌麿の流れをくむ文化から天保の頃の人で、当時大飢饉が相次ぎ、経済は困窮を極めており乍ら、江戸を中心に贅沢な風潮は改まらず、幕府では経済立て直しのため勤儉節約の気風の振興を図っていた。

『たとえば錢一文をわずかなりといえども、かるがるしく用ゆべからず、日々一倍のつもり左のごとく』と前置きし、毎日計画的に貯蓄して行けば、しらずしらずのうちに、思いがけない大金となる。と、教えている。

参考図書、大正11年発行『大日本古紙幣銘鑑虎僊楼』、昭和6年『日本古紙幣類鑑』荒木豊三郎、昭和29年『お札のうつりかわり』貯蓄増強中央委員会刊、昭和33年『藩札、上下』、昭和34年、『私札』何れも伏見、荒木豊三郎。

フランス人ビゴアの描いた半田陸海軍連合大演習(一)

桑原道雄

いまからざっと百年前、1890年(明治23年)3月末、半田を中心に愛知県下で、帝国陸海軍はじまって以来、空前絶後とみられる大演習が行われたことはよく知られていることである。明治天皇の雨中での統監は、天皇制国家の象徴として修身のドラマチックな教材になった。「明治23年、愛知県で大えんしふのあった時、天皇は、雨の烈しく降る中で、兵士と同じやうに御づきんをも召されず、御統監になりました。」尋常小学修身書巻四の冒頭にみられる文である。年輩の人には身におぼえがあり、記憶がよみがえってくるはずである。

連合大演習の全体的構想は、強力な一艦隊に支援された。各師団からなる陸軍2個兵团が、日本を侵略するというものである。陸海軍総勢3万とも4万ともいわれ定かでないが、陸軍も海軍も東軍(防衛軍)と西軍(侵入軍)に別れた。演習の行動は海軍からはじまった。神島、鳥羽沖での両軍の激しい砲撃は、お召艦八重山に明治天皇をはじめ、皇族、閣僚、各国公使等もこれを陪観した。陸上戦は、西軍(侵略軍)の高干穂(旗艦)扶桑、浪速など主力艦9隻の武豊砲撃ではじまった。運送艇3隻による武豊上陸には乃木希典少将も加わっていたという。

陸軍の演習は3月30日から4月2日までつづき、東軍が西軍を迎撃するという形で行われた。その演習区域は広く、地元武豊、半田、乙川、阿久比、三河では今村、里村、牛橋村、逢見村、牛田、来迎寺の地名も散見できる。名古屋方面では、桶狭間、鳴海、平針、天白、弥富、八事山は演習の足跡のあった所である。しかしそのハイライトは半田で、今日これを記念して、乙川白山公園や、半田雁宿公園には駐蹕を記す石

ぶみがみられる。



半田雁宿公園の明治天皇統監記念碑

半田博物館には、半田で一夜をあかした要人と、宿先の民家の名が表装されて展示されている。そこには山県有朋総理大臣をはじめとして、明治政府の個性豊かな元勳の群をみる事ができる。和紙に毛筆でかきとめられた人達の中で私が注目したことが3つある。「訳官」「陸軍お雇教師」「仏国ブリアント大尉」である。料理屋とはいえ新聞記者に宿まで用意したところは興味あるところである。しかし、全体を通して最も注目したいことは、陸海軍の演習だということに初代東大総長、渡辺洪基など文官も陪観していることである。

特にこの世紀の大演習には外国公使(外交官)が多数明治政府によって招かれた。外国公使の国とは今日のEC(欧州経済共同体)諸国とみてよい。それに清の現職大臣や、朝鮮の公使も。

そして、当然ながら、外国人ジャーナリストたちも取材に半田へ来たと思うのです。その中で、大演習の取材にフランス人ビゴアが来ていたことは私にとって意外であり、驚きであった。表紙に掲載されているイラストは演習を見物す

る半田村の農民（Les grandes manoeuvres-Paysans du village de Handa assistant aux manoeuvres）という説明で1890年9月13日号の週刊絵入りフランス新聞「ル・モンド・イリュストレ」Le Monde Illustréの紙面にのった四枚のうち一枚である。今日のように情報通信システムのない時代である。横浜の定期航路を利用しての発信だけに印刷までに半年かかることが理解される。

半田は明治22年10月村の人口5,000人で町制施行したばかり、ビゴの目からみれば風土も、風俗も村そのものであったにちがいない。イラストを見て下さい。春雨とはいっても冷たい雨の中、演習の様子をじっと半田の村人が好奇の目で見守っている。写真のようなスナップ的スケッチである。一見何げない作品に見えるがこれにはビゴ独特の

思いがそこに秘められている。するどい諷刺にみえてくるのです。中央でチョンマゲで腰をまげて、遠くを眺める男や、知多もめんかも知れない、ほっかぶりをした夫に、妻が相合傘でよりそっている。ビゴの興味をそそる、日本人の風習がいくつか描かれているように見える。番傘、高下駄、キセル、どれをとっても、ビゴの眼を通してみた庶民の生活感情がよみがえって来る。日本人が当然のこととして記録にとどめなかった、生活風俗の特異さを詩情をこめて、スケッチしている。例えば今日ではだんだん少なくなりつつあると思うが、けっしてなくならない日本人のポスチュア、腰をまげ、尻が地面にとどくような姿勢で、休んだり、人と話し会ったり、物をながめるかっこう。通称排便スタイ

ルという。ビゴはするどい観察力で、武豊海岸で砲撃している軍艦を見物する村人や、役人をこのスタイルでスケッチしている。ビゴのような外国人画家が、日本人の生活に異常な興味をもってスケッチしない限り、この時期、日本人は描かれなかったのである。ビゴの作品が貴重で現代人が見ても興味がつきないのはその為だと思われる。



食事する兵隊、ビゴ画（横浜開港資料館蔵）

当時の新聞というマスメディアにおいて、写真製版技術は未発達であった。ビゴのイラストのすばらしさは、ビゴの描写力のすばらしさに加えて、細密な表現を可能とする木口木版という技術を駆使して、迫力と訴求力の満ちた画面を生み出している。ツゲや椿のように目のつんだ材を輪切りにした木口を銅版用のビュランやノミで彫るため精緻で、細密な表現が可能なのです。木版画といえば浮世絵、明治期の錦絵を連想します。日進町のマスプロ電工美術館に陸海軍大演習をモチーフにした錦絵が数点あります。色あざやかですが、形式化、象徴化、装飾化しか表現できなかった時代、ビゴのイラストを見て息を呑んだことだろう。

本文のイラストは、表紙絵同様「ル・モンド・

イリュストレ」の同じ日付で出版されたものである。場所が特定できないのが残念である。おそらく三河の演習地であろう。腹がへっては戦はできぬとばかり、鉄砲も、背囊も投げすて、メシにありついているのが、なんともユーモラスでもある。タイトルは Les grandes manoeuvres japonaises-Lagamelle 軍隊の食事とある。

ジョルジュ・フェルディナン・ビゴー（1860-1927）はパリーの国立美術学校に学び、明治15年21才で来日、帰国するまで18年間、日本を描きつけ、痛烈な諷刺画で政府権力に攻撃を加えた。時局諷刺漫画雑誌「トバエ」を明治20年

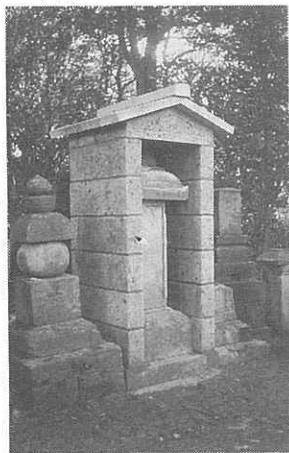
に発刊、23年半田への取材前に廃刊。「トバエ」は治外法権を利用して、横浜外人居留地が発信基地であった。有名な諷刺漫画「漁夫の利」はその発刊第1号にでてくる。「ル・モンド・イリュストレ」の特派員として半田に取材に来たのは30才頃で、仕事も油の、のりきった時代であろう。4年後におきた日清戦争には別の雑誌の従軍記者として朝鮮で活躍している。

国威をかけた大演習。明治政府の本当のねらい、目的は何であったのか、ビゴーのイラストをまじえて、再び次号で考えてみたいと思う。

越前三国浦藤右エ門船漂流之記(三)

増田 静子

韃靼の都から北京迄山も有るが、平地多く道幅が七・八間から十間許りあるよい道である。北京迄三十五日程の間に、海辺は一日だけで川も船で渡る程の川はない。



韃靼漂流者供養碑

『北京江参候時分韃靼ヨリ引越申候男女三十四五日ノ間引モ切ラス相見申候』明に勝った韃靼から北京へ、多くの人達が移り住んだらしい。

『韃ハ大明ト国境ニテ石垣ヲ築立申候萬里有之由高サ拾式三間程石ニテ無之瓦ノ様成物ニテ厚三・四寸ニシテ重テシツクヒ詰ニ仕候至極堅ク見ヘ申候焼物ニ葉ヲ懸申候如クニテ候ソコネ申事ハ無之候』道はこの石垣を削り抜き、其の

上に門櫓が建ててある。削り抜きの所も爪もかからぬ程しっかり出来ている。(以前テレビで万里の長城の放送を見たが、その時日本人で最初にこの万里の長城を見たのは、三国浦藤右エ門船の人達であろうと、レポーターの緒形拳が昔の姿で馬に乗り通り抜けて行く所があったが、とても興味深く見せて貰った。)

北京の王城は六里四方程あり、廻りは万里の長城と同じ様な石垣で囲まれ、門櫓を立て石火矢(昔の大砲)のある所もある。其の真中に堀をめぐらした御殿があり、瓦は五色に彩り葉を掛け光っている。

『四方ニ門四口御座候大手ノ門ニハ大キ成石橋五ツ懸リ候ランカン踏板残ラス何レモ石ニテ御座候ランカンニハ龍ノ彫物御座候見事成モノニテ候五ツ並ヒテ橋カカリ候何ノ為トタツネ申候正月其外御礼日橋式ツ三ツニテハ人セリ合間ニ合不申候故五ツ掛リ申候真中ニ有之候橋ハ大王行幸ノ時御渡橋常ノ人ハ不通候由申候』残り三方の門は石橋三ツ宛掛り、城郭の内には町屋

も丸柱で丈夫に作られ、商賣屋は日本の様に飾り富裕に賑わしく、韃靼の都とは違う様に見える。

北京は米が沢山出来るが、戦の為に年々高値になって来たようだ。

正月は日本の様に門松をたて、新しい装束を着け挨拶に廻る。五月五日は日本と同じに祝って粽も巻くが菖蒲はない。七月十四日から三日間佛を祭る事は日本と同じで

『寺々ニ木佛ヲ建置事一寺ニ一万体モ可有之候絵像モ御座候佛前ニ香花燈明種々ノ盛物備へ申候韃ニモ大明ニモ寺々多御座候何ノ寺ニモ佛前ニ経卷ヲ積重置申事日ヲ驚申程ニ御座候殊ノ外念佛ヲ信シ申候由』 七月の星祭りは無く八月十五日に星祭りをするという。明月の祭りかも知れない。

『北京ヨリ朝鮮ノ境迄道中ヨク候此間ニ幅二・三丁ホトノ川有之氷ノ上ヲ人馬トモニ渡申候』

朝鮮の都迄の間に大きな川が三つあり、是も氷の上を歩いて行った。韃靼人がずっと送って呉れたので、韃靼の言葉はよく覚えた。

韃靼の言葉 食ボク 馬ウレ 鶏テウコ 犬インタホ 男子ニヤアマ 女子ハハゼ 小娘サルハセ 大名アハリ 火ハトア 水ムカカ 湯ハルコ 家ホウ 川ヘウ 海ヒトリムツカ 今日イノキ 明日チマハ 明後日ラウレ 日シュン 月ヒヤロ 眼ヤサトロハヤンカ 鼻ヲホロ耳シヤ 手カウ 腹トロ 足ホウマ

北京の言葉 食ナンナ 鶏キイ 犬コシ 馬マア 男子ハンサ 女子ロツホウ 大名タアンシン 火ホウ 水スイ 湯ヤクスイ 家ハンス 今日キウルカ 明日メアル 明後日ヲルカ 朝ワウシ 昼シュンホ 晩ハンシヤ

両国共同じなのは、餅ホク 酒アツケ 味噌シシヨ 豆腐トウフ 船チョアン、煙草タイともタハコともいう。

両国共に通訳する者をトクワウと言う。竹内藤蔵の草履取り小野七と言う者が、当時十四・五才だが言葉をよく覚え、両国の人と自由に話をして後に通詞になった。これを人々はアチキトクワウと言った。アチキとは童形の事、トクワウは通詞の事。役所での話合又は町で番役人に止められた時等小野七に、大王様より何処へ出かけてもよいとお許しを貰っている事を話させると、すぐ罅があきいぎんに通して呉れた。

『若奉行衆御咎アレハ此者ヲ遣シ断候得ハ自由ニ通シ申候事天道ノ御助ト存候程ニテ御座候此者船中ニテハ殊ノ外不調法ニテ物覚サヘウトキ身ノ両国ノ人々ト詞ヲカハシ罅明候事十五人ノ者一ツニナリ候トモ中々叶申間敷候拾四人ノ者此草履取壺人ニテ助カリ申候事神明ノ御加護ナリト彼地ヨリ日本ノ伊勢ノ方ヲ遙ニ拜ミ申候』

藤右衛門の墓 福井県坂井郡三国町性海寺境内



帰って来た十五人の内、国留兵右エ門 宇野弥三郎の二人が江戸へ出て報告をしたのが以上である。大勢の人を亡くし苦しい事もあったであろうが、二年程の間に多くの貴重な体験をして帰って来た人達は、本当によかったと思う。三回にわたる漂流記はこれで終わりますが、古文書からは多くの事を知る事が出来楽しめるので、ずっと親しんでいきたいと思っています。

春の信楽、湖東の旅

— 5月12日、信楽散策、新緑の永源寺を訪ねて—

増田 静子

5月12日気持のよい朝、六古窯のーツ信楽への旅立ち、新緑の木々の中に藤の花が揺れ、つつじが咲く高速道路を、亀山伊賀と通り抜け信楽に入る。信楽鉄道で一昨年起きた事故の現場も一同黙祷しながら通り信楽陶芸の森に着く。

信楽は1,200年の伝統のある古窯どんな作品に会えるか、先ず小高い所にある陶芸館に入る。「熊倉順吉とその仲間たち」「陶クラフトデザインの展開」と題してオブジェありなじみ易いのあり、すてきな造形を見てこんなのが置ける庭があったらいいなと思ったりする。そこを出て少し下り円型の建物の信楽産業展示館に入る。

大きな瓶が見事に並んでいたり、つぶれて割れ目に入った然し風味のあるもの、小さい皿小鉢等あり、沢山の品がゆとりの有る配置で見よく時間を忘れる。外は広い土地で登り窯や創作研究館もあり、ゆったりと構成されていて気持ちよい。

昼の食事のレストランは前に特大の狸が立っている。外には大から小まで狸が一杯並んでいる。リボンを付けた狸もいて可愛らしい。

〽信楽の狸夏めく陽に並ぶ

次に谷清右衛門窯へ 先ず店の中へ入ると御主人がお茶を出して下さる。小柄だが貫禄のある優しい方である。信楽焼の湯呑でお茶を頂き、抹茶々碗や花瓶等作品が飾ってあるのを拝見する。玄関前の道沿いの建物には大皿が何枚も飾ってあるし、その外側に1升徳利が何百個も数段に並べられていてよく集められたと感心する。下には信楽と常滑の大甕が何個も置いてある。窯を見せて戴く為バスで店の裏手と思われる所へ廻る。ツツジが程よい配置で植え

られた坂の途中に清右衛門さんの作品、一米ばかりの三重の塔があり、風景にとけ込んでいる。

窯は上の方に二基下に一基、窯の中が階段になっていて四段目位から真中に仕切りがあり双胴窯といって二つの部屋になっているそうだ。

窯を焚く時薪を三百把も焚くとか、廻りには薪の山が幾つもある。下の窯は小振りで丸い感じ、一番上の所に顔の形が作ってあり目の所から炎の具合を見るらしい。楽しい遊び心である。



目を見張る徳利の行列

窯の隣に茶室が作ってあり石楠花も咲いて風流を楽しんでおられる様だ。

〽信楽の瓶に石楠花一枝活け

窯の見学の後収蔵品を見せて戴く 二階の二部屋に壺あり大皿あり茶碗あり、信楽焼の外に各地の古い焼物が沢山に並べられて、数はどれほどあるのかまだ戸棚の中にもあるとか、立派な資料館といえる。下は作業場で手廻しのロクロがあり息子さんが実演して下さった。土を紐状にして底の廻りに付け一段付けては膝でロクロを廻しながら上へ延ばし、又紐状のを一段付けて上へ延ばして行き、筒状になった所で木篋で下から上へスッと一撫で雅趣をつけ出来上り、

土の中に石英が交りキラリと光っている。ほかにも黒っぽいのもあり色々入っている土の様だ。手水を使わないから土はやわらかめにしてあるとの事 感心しながら見学させて貰う。お礼を言ってバスで次に向うのをお二人がずっと見送って下さった。

八日市から入った永源寺は愛知川に沿った臨濟宗大本山で 橋を渡り石段を百二十段程登った所左手3米位の高さの岩の上に十六羅漢が座しておられる古いものらしい。少し上り道を行き古いどっしりした山門を通り抜けると本堂の威容が目に入る。萱葺きかと思ったら葭葺きだそうで立派なものである。1361年に建てられて

から56坊二千余人余りの修行僧がいて名僧知識が集まったそうだが、1492年、1563年と戦火に焼失し、1600年代に後水尾天皇の帰依を受け再び立派になったそうだ。奥の方に修業道場もあった。もみじの木が沢山あり新緑が爽やかな空気を醸しだし秋には素敵でしょうねと話し合う。

〽秋ならば真赤く染まむ永源寺の

楓若葉の滴のごとし 肥田花子

心が和みゆったりとお参りを終え今夜の宿の金剛輪寺荘へ着く。静かな所にありテニスコートもあって若い人が楽しんでた。夕食は御馳走沢山で外の夕焼けも楽しみ乍ら話はずんだ。余裕のある見学の一日に満足し乍ら寝につく。

— 5月13日、白亜の長浜城から観音の里へ —

肥田花子

爽やかな朝を迎えて、散歩がてらに金剛輪寺へ連れ立ってお詣りに出かける。なかなかの道のりで、杖と手すりを頼みに登る坂道の、脇に立っている水子地蔵の愛らしい姿に心を和ませて、どうにか頂上に辿り着いた。

静寂を破る小鳥の声をきき乍ら思いっきり吸う山の空気がおいしく、心が洗われるよう、
〽しみ立てる老杉迫る金剛輪寺

梢に高く朝鳥の鳴く 水野美代子

下山は楽々で丁度朝食に間に合った。八時半金剛輪寺荘を出発一路長浜へ向う。

湖北、長浜は東海北陸地方の武将が京へ出る要路で、足利の頃、佐々木道誉の家臣の今浜氏が創築して今浜城と呼ばれた、後、天正の頃、羽柴秀吉が築城し長浜城と呼ぶ。天正11年、柴田勝家を滅ぼして秀吉が天下を握り、それより山内一豊が在城した。時移り慶長11年、最後の城主内藤氏が、摂津へ移封されて、遂に廃城となった。世は徳川家康の天下である。

本博物館は、市民の願望により、長浜城を模

して作られた。建ててから丁度10年になるが、華麗な容姿は辺りを払う趣きがあり、往時が偲ばれる思いにしばし仰ぎ佇む。三層五階で高さ32.75米 床面積は延1,338㎡ 展示室の広さ635㎡ 秀吉の画像や文書など数多く、他に国友鍛



白亜の長浜城を背にパチリ

冶の火縄銃が、当時の最新兵器の名残りをとどめ陳列されて居り、又湖北の歴史を物語る貴重な資料として、葛籠尾崎の湖底遺跡の出土品が、縄文時代の生活様相を知る唯一の手がかりとして展示されている。なお作庭家で今も名の残る

小堀遠州も、湖北の出身ときく。

広大な敷地には豪華なテニスコートが設備されていて、テニスを楽しむ人々の声が聞こえる。市民の憩いの広場には桜の樹がここかしこに植えられ、今は新緑が眩しい。草生に花どきを過ぎたたんぽぽのひと群れがあり、絮毛ワタとなって茎高く伸び、ふれずとも散りそうな風情。

〽あるとなき風にゆれつつ蒲公英の

絮毛あやふくかたち保てる 肥田花子
次は大通寺へ。

門前通りの小店を覗きながら着いた大通寺の大きな山門に思わず息をのむ。どっしりと構えた風格に圧倒されて唯々見上げるばかり。総檼ソウノキ作りで県内でも屈指の名作。長浜城の追手門をここに移したとき、起工より30年をかけて落成したとあり、県指定文化財

浄土真宗のこの寺は、蓮如上人や子孫らが導き広めた真宗の寺の一つで、熱烈な信者によってゆるぎない興隆を見るようになった。

寺宝は、南北朝時代の作の梵鐘に始まり、玄関には、江戸中期、彦根藩の井伊家の息女の数姫が輿入れの時使用したというお駕籠が、当時の華やかさを語り草に置かれてある。

大広間 書院 蘭亭 含山軒などの建造物が(重文、県指定)これも文化財級のものばかりの襖絵や屏風などにしきられ飾られ、どの部屋もくろずんで暗い、絵は狩野山楽、丸山応挙等の

筆による、山水や曲水の宴などが描かれている。

〽古畳踏みつつめぐる大通寺の

古りし襖絵に眼を凝らす 大沢よし子
数かずの宝物をたっぶり拝観して寺を出る。

七本槍で有名な賤ヶ岳の説明をガイド嬢に聞きながら琵琶湖の畔に沿って走るバスは軽快で間もなく奥琵琶湖ドライブインに着く。

食堂から眺める湖畔の景色も御馳走に加えて昼食に舌鼓をうつ、食後は湖畔をゆっくり散策、湖水が、折りからの陽の光に映えてきらめき囲りの木々の緑との対象が素晴らしい。

これより渡岸寺へ

渡岸寺は聖武天皇が、天平8年(736年)疫病退散の祈願の為、僧泰澄に刻ませた。十一面観世音菩薩が殊に有名。浅井、織田の兵火に危く焼かれるのを、農民が土中に埋めて難を逃がれた。身長一九五糎、胴は一木彫、優しいお顔の耳に珥瑠シロトウを飾り一寸お腰をひねった辺りに仄かな色気も見えてお洒落な観音様。

作家の井上靖氏がこよなく愛されたとか。国宝中の国宝と地元の人は自負している。隣りの高月資料館は、観音の里といわれるこの辺りの観音の資料を一堂に集めて観光客に説明して呉れる。お陰で観音様の種類の多い事なども知り勉強になった。いささかの知識を身につけ心豊かな二日間の旅も無事に終え、予定より早い時間に帰途に着いた。皆さん大変お疲れ様でした。

【民俗資料館長更迭】

去る4月の人事異動により、館長 水上 健氏が定年退職されました。在任2年と短い期間ではありましたがこの間当友の会の為に、ひとり方ならぬご支援ご協力を賜り、誠に有難く厚く御礼申し上げます。今後も健康に留意され、引続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

後任には都市計画課から、盛田宏明氏が着任されました。同氏は29年の長きに亘り、市の重要職務を歴任されたお方です。今後共益々のご活躍と、一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

第14号、平成5年(1993)9月25日発行、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203
電話〈0569〉34-5290 編集担当者 渡邊榮造 印刷 株式会社 好文